訳者あとがき

ソウルにある戦争記念館には、朝鮮戦争で戦死した兵士を検索するデータベースが置かれている。スペイン語圏でよくある名前、例えば〈フアン〉と検索窓に入れると、六十一人の名前がリストになって出てきて、名前、所属、国籍、生誕地がわかる。うち二人は国籍がコロンビアとある。〈ホセ〉と入れると二十五人のコロンビア人、〈ペドロ〉と入れると六人。国籍をコロンビアにして検索すると、二百十三件が表示される。二〇二四年現在わかっている朝鮮戦争で戦死したコロンビア兵士の数である。

戦争記念館の展示資料によれば、コロンビアは朝鮮戦争に総勢五千百名の兵士を送っている。コロンビア大隊の第一便はコロンビアの太平洋岸の港から米国の船に乗ってホノルルを経由し、一九五一年六月十五日、釜山に着いた。戦争中、休暇で横浜に滞在した兵士もいる。

コロンビアはラテンアメリカで唯一、朝鮮戦争に派兵した国である――これは戦争記念館の正面に並ぶ石碑に記され、コロンビアの歴史書やメディアがこの戦争との関わりを説明するときの常套句だ。しかし朝鮮戦争で戦って死んだラテンアメリカ人はコロンビア人だけではない。プエルトリコ出身者もメキシコ出身者もいる。

朝鮮戦争に行ったコロンビア兵のことでは、ガルシア＝マルケスの「朝鮮から現実へ」というルポルタージュがあり、日本語に翻訳されている（『ジャーナリズム作品集』鼓直／柳沼孝一郎訳、現代企画室）。内容は帰還兵の社会復帰をめぐる諸問題を報告するもので、コロンビアの新聞に発表されたのは休戦後の一九五四年である。

四半世紀ほど前、コロンビアで朝鮮戦争に従軍経験のある男性と知り合ったことがある。しかしそのときは、私がアジア出身者だと知って教えてくれたのだろうと思うだけで、話は別のほうに進み、朝鮮戦争に話が戻ってくることはなかった。もしかするとそのコロンビア人は何かを言いたかったのかもしれない。

いま振り返ってみると、当時の私には、日本による植民地支配と無関係ではあり得ないこの朝鮮半島の戦争とコロンビア人の経験を、自分に引き寄せて考える力が欠けていたと思う。しかしその後、キューバ文学を主に研究して冷戦体制下のキューバ人について、彼らが参加した戦争（例えば、アフリカのアンゴラ内戦）について考えるようになった。冷戦終結がもたらしたキューバの経済危

機について書かれた小説を翻訳する機会も得た（カルラ・スアレス『ハバナ零年』共和国）。こういう経緯で冷戦期とラテンアメリカ文学を考え直していくうちに、朝鮮戦争、ラテンアメリカ文学、東アジアの中の日本の歴史、その中にいる私が一つの線で結ばれていった。

探してみると、プエルトリコ人やメキシコ人が朝鮮戦争について書いた小説が一九五〇年代からあった。コロンビアでは一九九〇年代に出た小説もあった。こういう本を発見していく中で、ボゴタ出身でソウル在住のアンドレス・フェリペ・ソラーノが二〇一六年、朝鮮戦争を取り上げた小説を出した。そして二〇一九年、フアン・ガブリエル・バスケスのこの短篇集が出た。この作家の長篇を一冊翻訳したことがあったので、すぐに読んだら一篇が朝鮮戦争の話だった。どうにかして翻訳したいと思った。

この作家の紹介に多くの言葉はいらないだろう。一九七三年にコロンビアのボゴタで生まれ、ヨーロッパで学びながら小説を書きはじめ、これまで四冊の長篇が日本語になっている。原書発表順に、『密告者』（服部綾乃／石川隆介訳、作品社）、『コスタグアナ秘史』（久野量一訳、水声社）、『物が落ちる音』（柳原孝敦訳、松籟社）、『廃墟の形』（寺尾隆吉訳、水声社）である。本書『歌、燃えあがる炎のために』は、『廃墟の形』のあとに出た最初のフィクション作品で、すでに英訳や仏訳もあるし、書評も出ている。バスケスはこの本について、書き溜めた短篇の寄せ集めではなく、まとまりのある構成に組み立てた短篇集だと言っている。

短篇九つのうち、朝鮮戦争が出てくるのは「蛙」である。韓国からコロンビアに寄贈された戦死者追悼の仏塔がボゴタにあり、この短篇はそこで催されている記念式典を舞台に展開する。帰還兵たちが朝鮮戦争（ポークチョップ・ヒルの戦いやオールド・バルディの戦い）を回想している場面から、徐々に、思い起こしたくない過去を共有する二人に焦点が合っていく。出会うはずのない帰還兵と政府高官の娘が抱えている秘密が明かされていくプロセスは、ときが過ぎたとしても、いや、ときが過ぎれば過ぎるほど、過去が現在に重くのしかかってくることを感じさせる。バスケスは朝鮮戦争について長篇を準備中だと言っている。ということは、この作品を習作のように書いたのかもしれないし、この短篇を書くことが長篇執筆を決意させたのかもしれない。「蛙」はこの短篇集の中では、語りの形式がほかの多くが一人称で語られるのとは違い、唯一、三人称をとっている語りで、一人称が多い彼の作品を見渡しても珍しい。その意味では彼の今後を予告する作品かもしれない。

この短篇集は朝鮮戦争だけでなく、二度の世界大戦や紛争、テロや事故などの「後」を、それらの暴力による死を生き延びた人を書いている。死を乗り越えた人ではなく、死を生き延びてしまった人だ。「川岸の女」のヨランダ、「分身」の主人公、「悪い知らせ」のジョンとローラ、「空港」のポランスキー、「歌、燃えあがる炎のために」のアウレリアと息子のグスタボ。バスケス本人を思

わせるような語り手が、暴力のその後を追いかける形で展開したり、当事者が語り手に語った物語の再話になっていたりする。

最初の「川岸の女」と最後の「歌、燃えあがる炎のために」は、その中でもとくにこの特徴が出ている。この二作は登場人物が重なるだけでなく、冒頭を読めばわかるように、対をなしている。「川岸の女」の語り手は、「ぼくは、その女性写真家が語ってくれた物語をずっと書きたいと思ってきた〔……〕」と言う。そして「歌、燃えあがる炎のために」では、「ぼくは〔……〕あらゆる物語を〔……〕語らなければいけない」と言う。

語りたいという欲望と語らなければいけないという義務感（ナダル・スアウ）――この二つは、作家が抱え込んでいるある種の不安であるように思えてならない。そしてこの二つの契機に向き合うことで、作家は、ただものを書いてそれで生活の糧を得る職業作家ではなく、この世でかけがえのない存在になれるのではないか。

写真家ホタの語った物語を語り手がホタに成り代わって語り直したのが「川岸の女」である（「最後のコリード」にも語り直しが含まれている）。写真家が再話を望んだ理由は、語り手によって語られた内容を一読者として読むことで、写真家自身から「こぼれ落ちていったものが何かわかる。あるいはせめてそれがわかりかける」からだ。当事者にわからなかったことがわかる可能性に賭けている。一方、「歌、燃えあがる炎のために」では、当事者は語り手自身である。真実が見つかる

可能性に賭けて、作家としての自分が書く。
それが歴史家やジャーナリストによるものではなく、物語（フィクション）である理由はなんだろうか。バスケスはカルロス・フエンテスを引用しながら、物語は人の経験を知識に変容させたものだと言っている。その知識は曖昧で不正確だが、その知識がなければ世界は不完全で断片的なものに、場合によっては重大なまでに欠陥のあるものになってしまう、と。さらに、物語は人間性の領域に属し、触れたり証明できたりする事実ではないもの、とも言う。歴史家もジャーナリストも立ち入れないところを書くのがバスケスの考える作家である。
そうして書かれた物語は読者に委ねられる。その中に何かを見つけるのは読者である。物語とは、事実を記録するだけでは書ききれない何かが見つかるかもしれない望みに賭ける作家と読者の協力によって生まれる。
文学を読んでいていつも思うのは、物語を書くこと、読むことの意味はなんだろうということだ。簡単に答えは出てこないが、バスケスの作品には、それに対する一つの答えが示されていると思う。
バスケスの長篇の読者にとっておなじみの特徴がよくあらわれているのは、表題作「歌、燃えあがる炎のために」だろう。十九世紀終わりのコロンビアから第一次世界大戦、そして二十世紀の終わりまでを一気に書いてしまう筆力は圧倒的で、こういう既成のものをはみ出していく過剰さが彼

の魅力であるに違いない。短篇集の最後の作品だが、これまでの長篇四作の後日譚のような内容を含んでいる。バスケスはこの短篇集をもって、これまでとこれからの間に一本の線を引いたのではないだろうか。

この短篇の最後には、作品内で言及されるウリベ・ウリベの本のタイトルページを写した画像が掲載されている。タイトルページの対向のページに直筆で書かれているのは、作品中、コロンビア人夫婦が息子に贈った本に添えたフレーズである。

本書は、Juan Gabriel Vásquez, *Canciones para el incendio*, Alfaguara, Barcelona, 2019 の全訳である。訳出にあたっては、アン・マクレーン（Anne McLean）による英訳、イザベル・ギュニョン（Isabelle Gugnon）による仏訳を参照した。

翻訳をはじめてから完成までに二年以上もかかってしまった。担当してくれた井戸亮さん、後を引き継いでくれた廣瀬覚さんは、訳文を丁寧に読んでくださって、励みになった。この「あとがき」は廣瀬さんとの対話を通じて書かれたものである。記して感謝します。

久野量一